令和六年十一月度　御報恩御講拝読御書

法華取要抄

文永十一年五月二十四日　五十三歳

諸病の中には法華経を謗ずるが第一の重病なり。諸薬の中に南無妙法蓮華経は第一の良薬なり。此の一閻浮提は縦広七千由善那八万の国之有り。正像二千年の間未だ広宣流布せざる法華経を当世に当たって流布せしめずんば釈尊は大妄語の仏、多宝仏の証明は泡沫に同じく、十方分身の仏の助舌も芭蕉の如くならん。

（御書七三五ページ一三行目～一六行目）

令和六年十一月度 御報恩御講 『法華取要抄』 （御書七三五ページ一三行目～一六行目）

【通釈】

諸病の中には法華経を誹謗することが第一の重病である。諸薬の中では南無妙法蓮華経が第一の良薬である。この一閻浮提は縦横が七千由旬あり、その中に八万の国がある。正法・像法二千年の間いまだ広宣流布していない法華経を、この末法の世に当たって流布させなければ、釈尊は大妄語の仏ということになり、多宝仏の証明は水の泡と同じになってしまい、十方分身の諸仏の舌相も、芭蕉の葉のようにもろく破れてしまうであろう。

【主な語句の解説】

一閻浮提…仏教の世界観で、人間が住む世界のこと。閻浮提、南閻浮提ともいう。

由善那…古代インドにおける距離の単位で「由旬」に同じ。一説には、一由旬は帝王が一日に行軍する距離ともいわれている。

多宝仏…多宝如来のこと。法華経見宝塔品第十一で、多宝塔の中に坐して出現し、大音声をもって釈尊の説く法華経が真実であることを証明した。

十方分身の仏の助舌…法華経如来神力品第二十一に「諸仏も、亦復是の如く、広長舌を出し、無量の光を放ちたもう」（法華経五一〇）とあるように、十方世界から集った分身諸仏が、釈尊と同様の広長舌相を示して法華経が真実であることを証明したことを指す。釈尊の説法を助けるためにこの相を示したので「助舌」という。

芭蕉…バショウ科の植物。葉は太い繊維質で形成され、葉脈に沿って裂けやすい。

【背景と大意】

本抄は、文永十一（一二七四）年五月二十四日、日蓮大聖人五十三歳の御時、身延入山直後に述作され、下総（千葉県）の富木常忍に与えられた御書です。本門の本尊・戒壇・題目という三大秘法の名目が、初めて整足して明かされた重要書であり、日興上人により御書十大部の一つに選定されています。

本抄の題号について、総本山第二十六世日寛上人は『法華取要抄文段』に、「一代経の中には但法華経、法華経の中には但肝要を取る、故に『法華取要抄』と名づくるなり」（文段四九七）と仰せられ、また内容について、「当抄の大意、略して三節有り。初めに一代諸経の勝劣を明かし、次に今経所被の時機を明かし、三に末法流布の大法を明かす」（同）と御教示です。

従って本抄の大意は、一に一代諸経中、法華経が最勝であること、二に法華経の真の目的は滅後末法、中でも特に日蓮大聖人のためであること、三に末法流通の大法は法華経の肝要たる三大秘法の南無妙法蓮華経であること、となります。本日拝読の箇所は第二段にあり、妙法こそ第一の良薬であり、これを大聖人が末法に広宣流布することを明示されるところです。